

英語で小説を読む：

文体論の知見は深い読みに繋がるか

鈴木 栄

"It is in the nature of books that they have the capacity to make you feel powerful about what you can alter and achieve in your life."

Margaret Mahy

1. 研究の背景

電車の中で本を読む人が少なくなったと感じる人は多いであろう。人々の「本離れ」に関する報告も目にする。実際は、紙媒体で本を読む人だけでなく、Kindle や iPad などで本を読む人もいることから、本を開いていない人の数が増えていても、必ずしも「本を読む」人がほとんどいない、という絶望的な状況ではないかもしれない。

日本の大学で英文学を教えることの危うさ (uncertain state of English-language literature teaching) を訴える論文が目につく。その一つに Burton (2018) が呈した論文で、21 歳から 23 歳の学生 (TOEIC のスコアが平均 714 の学生で、英語力はかなり高い) 10 名へのアンケートとインタビューをまとめたものがある。英語の小説を読むことが好きか、という問いに対して「好き」と回答した学生は、その理由として、「文化や景色を思い浮かべることや文法的な表現を学べることができること」を挙げている。一方、「嫌いである」と回答した学生は、「難しいことと小説の読み方を習っていないこと」を挙げている。英語の小説を読むことの必要性に関しては、「日常生活では使わない特殊な表現を学ぶことができる」、「翻訳では伝わらない曖昧な表現を学べる」、「異なる文化を学ぶことで英語の力がつく」とい

う肯定的な回答が多かった。授業外で英語の本を読むか、という問いには、11人中7人が「いいえ」と回答し、「授業内で読むのが精一杯である」と書いた学生が多かった。英語の小説を読んで役に立つことについては、半数の学生が「ない」と回答しているが、「*Animal Farm* を読み、ハッピーエンディングでないことが社会について考えるきっかけになった」、「*Great Gatsby* の中の台詞が好きである」と書いた学生もいた。好きな作家については、「特にいない」と回答した学生が半数を越えたが、J. K. Rowling が2名、Dan Brown, Alex Shearer, Darren Shan が各1名であった。同じ学生に、日本語の小説についても聞いているが、日本語で読むものについては、漫画が圧倒的に多く、その他は、ラブストーリー、フットボールの雑誌、日経新聞、エッセイが各1名であった。中学校や高校の授業で、英語の小説を読んだことがあるか、という問いには、10名中6名が「ない」と回答している。

東京女子大の1年生対象の Reading クラス（上位クラス22名）で同じアンケートをしてみた（回答数16）。英語で小説を読むのが好きか、学ぶことがあるか、という問いに、好きかという問いには6名が否定の回答をしたが、英語で小説を読む必要性に関しては14名が「必要である」と肯定的な回答している。英語の小説を授業外で読むかという問いには、9名が「ない」と回答しており、英語の小説を読んで役に立った経験への問いには14名が否定的な回答をした。中学校・高校で英語の小説を読んだ経験については、16名中10名が「はい」と回答している。日本語の小説を読むか、という問いには、3名が「いいえ」と回答した。読むものについては、漫画と小説が挙げられた。Burton のアンケート調査では聞いていないが、「英語の文学が読まれない理由」と「日本語の文学が読まれない理由」について聞いてみた。英語の文学に関しては、「難しい、長い」という回答が多く、それ以外には、「主人公の行動や状況が文化的違いから理解しにくい、日本語の文学を読む以上に頭を使う（頭に入ってこない）、風景描写などが日本人にはなじみがないものが多いので物語の世界感に入っていけないことがある、長いと読む気がしない」が挙げられた。「英語への苦手意識」と書いた学生

もいた。日本語の小説を読むことについては、「古い作品は日本語の表現が異なる、読む時間が無い、スマホやゲームの方が楽しい、本屋や図書館に行く機会がない、文学に興味が無い、インターネットで事足りる、長く内容が複雑だ、本を読むのが楽しくない、一人で過ごす時間が少ない」と様々な回答が寄せられた。

アンケート回答数は多くはないが、現在の大学生が「英語の小説を読むこと」に関してどのような考えを持っているか多少理解を深めることができた。英語の小説を読むことに対しては、ある種の期待を持っていることがわかったが、一方で、語学力不足による理解力の欠如と、学ぶ機会が与えられてこなかったことが窺えた。アンケート前に想定していた「学生の本離れ」は事実のようである。その原因として、忙しいことやインターネットやスマホの普及があることもわかった。要するに、そうした機器が無かった時代に比べ、現代は情報が矢継ぎ早に提供され、ゆっくりと本を紐解く時間が無いのだ。

では、学生に文学作品を提供することが非常に困難かと言うと、回答の中に僅かではあるが、希望の兆しも伺える。学生達は、大学に来るまで、英語の小説を読む機会がほとんど与えられて来なかったのである。知らないことには興味を持ちにくい。モチベーションには、motivational attractor（モチベーションに繋がるきっかけ）が必要である。大学3年生にもなると、必修の英語科目が無くなるため、積極的に英語を履修しようとする学生以外は、「英語の授業を履修していないので英語を読んでません」と当たり前のように言う。「ふーん」と聞きながら、心の中では「何を言っているのだ」と思う。高校まで英語を勉強し、受験勉強という密な英語学習時間を過ごして来たのであろう。すでに、「英語を使える」手段は与えてもらっているのだ。船の漕ぎ方を習い、川岸に立ち、船に乗り、漕ぎ出して行くのか、それともせっかく習った船を漕ぐという技量を使わず陸に留まるかは本人の意思次第である。そう考えながらも、学びを外に広げていくことに慣れていない学習者には、学校で学習したことを自分の日常生活に取り入れていくことは

難しいかもしれないと考えてみたりもする。歴史の授業で覚えた年号を使うことはめったに無く、化学の実験を家ではしない。学習内容と日常生活の乖離は学校教育ではよく見かけることである。そのギャップを埋めることも、ある意味では教育の責任であるとも考える。学んだ知識を「繋げる」ことが大切だ。

一方、教える側に関して、英語科に関する専門事項における教職課程担当者の見解の調査（飯田他，2019）結果では、問題・課題のカテゴリーの中に「英語文学」が含まれていた。これは中・高英語教員養成カリキュラムを担当する大学教員149名からの回答をまとめたものである。英文学に関して、「文学は難しい言語材料であるが、読んで楽しめるようになるということは英語力が身につけていることを意味している」という回答がある一方で、「文学作品をきちんと理解しているか評価する手法がない、英語文学に関心を持つ学生が少なくなった」という回答があった。

英語教育ではCBI（Content-Based Instruction）や、CLIL（Content and Language Integrated Learning）という指導法で、「英語で何を教えるか」について議論される場合がある。前者では、環境問題、演説、人種問題、などが取り上げられ、後者では、体育や化学の授業を英語で一部おこなうような試みが行われている。EFL（English as Foreign Language）の環境にある日本では、英語を日常生活で使用する機会が限られているため、必修科目としての学校学習以外の自発的な学習は学習者に委ねられている。

学習者に教室外や履修後に自主的に自律的に英語を使い続けてもらう機会になることを願い、英語の小説（novel）（Short, p. 255）を授業に取り入れることで学習者の英語の小説への興味・関心が広がることを期待し、アクション・リサーチをおこなうことにした。

2. 研究方法

2.1 アクション・リサーチ

アクション・リサーチ（Action Research）は、授業改善を目的とした、

振り返りを取り入れた教授法（reflective teaching）を目標とした実践研究である。つまり、理論や経験からヒントを得て授業実践をしながら、実践の経過・結果を客観的な視点で考察し、得られた知見を次の実践に移すアプローチのことである（佐野、2007）。アクション・リサーチの本来の目的は、教師と学習者が直面している問題解決、あるいは、教授法の改善を目的とするため、その対象が異なる場合には、一般性が出にくい。教師や学生が異なる場合に、同じような結果を得ることができるかは予測できないからである。しかし、1つひとつのアクション・リサーチを、ケース・スタディー（case study）のように捉えれば、ある種の一般性が生まれるのではないかと考えられる。教育の現場では、多くのケース・スタディーがおこなわれることで、状況を分析し、よりよい授業を組み立てる糸口が見つかる。そうした意味でのアクション・リサーチの意義は大きい。

アクション・リサーチのステップは、Nunan（1999）によると6段階に分けられる。①問題の確定（problem identification）②予備的調査（preliminary investigation）③仮設の設定（hypothesis）④計画の実践（plan intervention）⑤結果の検証（outcome）⑥報告（reporting）である。これらのステップは絶対的なものではなく、実際の研究現場によってはステップが重なることもある。基本的な振り返り教授法（reflective teaching）が採用されている限り、アクション・リサーチの効果は期待される。

2.2 研究の流れ

Nunan によるアクション・リサーチの実施ステップを踏んでおこなうことにした。①の問題の確定では、Burton を初めとする英文学を教える教育者たちの論文から、「英文学に対する学習者の興味が減少し、それに伴いシステムの縮小化が観られること」、とした。②の予備調査では、学習者の英語小説（文学）に対する考え（attitudes）をアンケートで探った。さらに、『教室の英文学』（2017）に書かれている英文学に関する授業実践を調べ、どのような教え方が学生の心に残る英文小説の授業案となるかについてまとめ、実

際の授業案を作成する参考とした。③の仮説は以下のように設定する。

仮説 1: 学生の英語小説に対する考え方や感じ方は授業（教え方）によりポジティブなものに変化する。

仮説 2: 英語小説の解釈と感想は、文体論の知見を入れた分析方法を知る前と後では変化する。

仮説 3: 学生は、英語小説を原文で読む過程で、文体についての発見をすることで深い解釈をすることができる。

④計画の実践（plan intervention）では、学生の英語小説に対する意識調査をおこなった結果に基づき、テキストを選択する。次に、文体論の中から、今回のテキスト理解のために相応しい項目を選択し、ワークシートを作成する。学生は、小説を読む前に、まず自力で読み感想票に描かれている内容理解に関する質問に答える。その後、授業で内容把握と同時に、文体論の項目について理解してから本文を再度読む。2 度目の感想票への回答をおこなう。

⑤結果の検証（outcome）では、学生の 1 回目と 2 回目の感想票に書かれている内容から、学生の読みが深まったかを検証する。また、最終レポート（小説のメッセージ・メインテーマ・気に入った表現）を検証し、学生がどの程度小説を理解することができたかについてまとめる。こうしてまとめた本稿を⑥の報告（reporting）とする。

2.2.1 アンケート結果

アンケート（Appendix1 参照）は、17 項目にわたり、英語の文学作品講読と日本語の文学作品講読について記入式でおこなった。本節では、英文学に関する回答をまとめる（表 1）。

2.2.2 英語の小説をどのように教えるか

文学作品を教室で教える際に、何を目的とするかを明確にする必要がある。作家の生い立ちを調べ作品の中に作家の人生がどのように映し出されているか考察するアプローチや、作品が書かれた時代や文化を作品の中から浮

表 1. 文学作品に関するアンケート回答

2. 英語で文学作品を読むことは重要ですか。	はい 20	いいえ 0
何を 읽습니다か。	児童文学 4	古い作品 2
3. 授業以外で英語の文学作品を読みますか。	はい 1	いいえ 19
6. 好きな英語文学の作家は誰ですか。	ルイス・キャロル 2 J・K ローリング 2 ロアルド・ダール 3 ヘミングウェイ 1 シェイクスピア 1 ダイアナ・ジョーンズ 1	
7. 翻訳された英語文学作品を読みますか。	はい 12	いいえ 7
15. 英語の文学作品を中・高で読みましたか。	はい 7	いいえ 13
16. 英語の文学作品が読まれない理由は何ですか。	難しそう 9 時間がかかる 3 意味がわからない・理解できない 文化が違う・身近ではない 長い・言葉が難しい 調べないと読めない・本屋にない 入試に出ない	

回答者 20 名

き立たせるアプローチもあろう。あるいは、精読をして内容把握をするアプローチもある。英語を母語としない学習者が英文学を教室で学ぶ際にどのようにするのか、様々な議論があると予想される。

Widdowson (1975) は、著書 *Stylistics and the Teaching of Literature* の中で、英語を母語としない学習者が英語で書かれた文学作品を読む場合には、特に、その作品の中に現れる言語使用 (language use) を理解することで作品を鑑賞できるとしている。海外の文化 (culture) という教科において文学を使用する場合については、文学作品を通して文化を教えるのであれば原文でなく翻訳でも事足りると主張し、文学を単なる事実のデータ (factual data) としてしまうと危惧している。あくまでも文学作品の中に表現されている言語に注目をさせることが重要であると述べている。そして、Stylistics (文体論)こそが、英語という言語と英語文学を統合させる方法であると主

張する。

Widdowson に言わせれば、実用英語を重要視する流れの中で、文学作品をテキストとして使い、その中に出てくる表現や機能（functions）を語学学習と結びつける教材も多く見られるが、それは本来の文学作品の学びから逸脱しているということである。

文学作品を文体論という眼鏡を通して読むという Widdowson の主張には賛成する。そのため、原文をそのまま使用することとする。作品を通して文化学習とすることを批判する Widdowson の姿勢は理解できるが、学習者が英語母語話者ではない場合には、作品の中に出てくる文化的な情報も作品を理解する上では重要な手がかりになるため、文化的な要素にも注目をさせることにした。

2.2.3 テキスト選択

計画の実践に向けて、まず教材となるテキストを探すことにした。限られた授業時間内でおこなうこと、文学の授業という括りの中での実践では無いことを考慮し、長いものは避けた。文学に縁遠い学生対象である場合は、特に、「物語の面白さ」を重視してテキストを選ぶことが大切である（秦，2017）ことに加え、教える側が関心をもつものであることが重要である。自分が面白いと感じ、その作品を読んだことで何かを得られた作品でなければ学生に説得力のある説明はできない。学生が名前くらいは聞いたことのある作家の作品を選ぶ（諏訪部，2017）という考え方もあるが、学生のアンケートに作家の名前がほとんど書かれていない状況を鑑み、今回は、教員の選択にした。

テキストに何をを使うかについては、次の点に配慮した。

- ①学生が読んで困難を感じないものであること。
- ②教える側がテキスト内容を仲介して学生に学びや気づきを喚起したいものであること。
- ③編集されたテキストではなく、原文であり翻訳本が出ていないこと。

選択したのは、ニュージーランドの国民的児童文学作家である Margaret Mahy の短編 *Chocolate Porridge* である。興味ある作品への回答に児童文学と書いた学生が一定数いたこと、読みやすいこと、ストーリーの中に教育的示唆 (pedagogical implication) が含まれていることが選択した理由である。

2.2.4 物語のあらすじ

物語は、ある金曜日の午後に、男の子 Timothy の母親と姉たちが週末の料理をしている場面から始まる。どうやら姉の Pink と Sally はキッチンで母親の料理の手伝いを許されているが、小さい Timothy は、キッチンが狭いと母親に言われ入れない。「男の子は料理なんてしないものよ!」(“Boys don’t cook!”)「男の子は料理なんてできないのよ!」(“Boys can’t cook!”)と姉たちに言われ、Timothy は反抗するが、「あんたは小さいからだめよ (“You are too small to be a cook.”)」とにべもなくはねつけられてしまう。

すごすごと外に出ると、Timothy の父親が庭仕事をしている。Timothy はあたりを見回し、植木鉢に目をつける。料理で使うこね鉢に似ていたからである。そして、掘り起こされた土はチョコレートに見えた。そして、土を鉢に入れて手でこね始めた。

それを見た姉の Sally と Pink は、「また泥パイを作ってるんでしょ (“I suppose it’s just the same old mud pie.”)」と鼻で笑う。Timothy は、姉たちに何を言われてもひるむこと無く、Chocolate Porridge (チョコレート粥) を作り続ける。そして姉に続きキッチンに入り、塩をもらい、「食べる人たちが気に入るから (“They like it salty.”)」と塩を土の混ぜ物に入れる。自分の作った Chocolate Porridge を見ながら Timothy は考える。自分はこれを食べたくはないけれど、食べたい人がいるはずだ。でも、誰だろう?

そこへ庭仕事をしていた父親が近づいて来る。キッチンから追い出されている Timothy を慰めるように、「ここの方がいいさ。台所は混乱しているから (“You’re lucky. There is a terrible mess in the kitchen.”)」と声をかける。Timothy は自慢げに、自分だって料理をしていた、と Chocolate Porridge を

作ったと見せる。「こんな素晴らしい Chocolate Porridge は見たこと無い」と褒める父親に Timothy は言う。「でも、誰が食べるんだろう？」それに対して父親は驚くようなことを言う。「ちょうどよかったよ。今日、永久下宿人 (permanent paying guest) を連れて来たんだ。彼ならこの Chocolate Porridge を気に入るさ」永久下宿人は、リンゴの木であることがわかった。父親と Timothy は、リンゴの木のために穴を掘り、Chocolate Porridge を与えた。ほどなくしてキッチンから出てきた母親と姉たちに Timothy は誇らしげに言う。「木は Chocolate Porridge が大好きさ！」それを見ていた姉の Pink と Sally は、木のために料理をするのも悪くはないと考え始める。「木のための料理の日なんて考えてもいなかったけどそれもいいかも (“I didn't think of a cooking day for trees. It would be fun.”)」と Sally が言う。それを聞いた父親は言う。「女子も庭を手伝うことができるよ (“The girls can help in the garden.”)」Timothy の母親が続けて言う。「そうしたら Timothy はスコーンの作り方を習えるわね (“And Timothy can learn to cook scones.”)」

2.2.5 教育的示唆

ある家族の週末の風景である。特別なことが起こるわけでもなく、どこの家族にも見られる午後の時間であるが、その中に、人間関係の機微、男女の役割、親子関係が織り込まれており、そこから学べることは、「共感 (empathy)」「回復力 (resilience)」「発想の転換」であり、いずれも現代社会を生きていく上で必要な人間力であると考えられる。

男の子は料理ができない、料理をしない、と姉たちに決めつけられ台所から出された Timothy は、くじけることなく、自分で料理をする方法を探し出す。「ドロ団子作ってるんでしょ」と姉たちに言われながらも、Timothy は、諦めず、何か特別なもの (something unusual) を作ると発憤する。

Timothy の父親は、Timothy が作った泥のポリッジを一体「誰」が食べるのだろうと不安を表明した時に、彼に共感し、ある考えを思いつく。それは、運んできたリンゴの木を人に見立て命名することだった。“I've brought

a permanent paying guest (永遠の下宿人) home with me.”と言う。ゲストは男性である (“I think he will love that chocolate porridge.”)。木を男性と見立てることで、台所から Timothy を追い出した女性陣に対抗する意味が加わる。

ここで父親は、「勝ち」を表明するのではなく、「木のために料理する日 (cooking day for trees) も悪くない」と考え始めた娘達に、今度は役割を交換してはどうかともちかけ物語は終わる。

この物語の父親の役割は、社会における年長者、教師、親のあるべき役割を示している。人間関係において何らかの摩擦が起きた時に、両者の気持ちを考え、代案を提案し、両者の立場を尊重し、勝敗を決めるのではなく協調する仲介役を担う大人の姿である。こうした姿勢は、社会で、あるいは教育現場で役に立つ。このような暗黙のメッセージを、読者である学生が汲み取ってくれることが望むところである。

2.2.6 読解への糸口 (文体論の視点から)

次に、テキストのどこに注目をさせて進めるかについて考えた。これについては、文体論の視点のいくつかを入れるために *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose* (Short, 1996) の Chapter 9 (p. 255–286) を参考にした。

まずテキストを、マクロの視点から捉え (Short, p. 256)、「語り手 (narrator)」が誰であるかによって、どのような視点 (perspective) から語られているかを知る手がかりとする。語り手が私 (I) である場合には、すべての事実を知っているわけではなく、時として読者を誤解に導く可能性がある。第三者 (third person) が語る場合は (多くの場合に使われる)、この第三者が、作者と同じ視点を持つと考えられる。視点/語り手への注目は、細部への注目をもたらし、「行間を読む」という小説の読み方にも通じる (諏訪部、2017) と期待できる。また、「物語とは、常に、ある出来事に対する (誰かの) 解釈である」(秦、2017) ことを考慮すると、作品の登場人物のそれぞれの視点からの物語展開を考える機会を作ってみても興味深い議論ができる

かもしれない。

一方、ミクロな視点（Short, p. 256）から細部に目を向けることで作者の小説技術を読み取ることができる（諏訪部、2017）と期待したい。Short が記している言語選択（linguistic choices）にまず目を向けさせたい。作者が選んだ言葉には何か作者の意図があるのか、選んだ言葉でどのような効果を期待していたのか、についての考えが深まればよい。

- ①反復（repetition）、つまり物語に繰り返し現れるモノやイメージに注目（秦、2017）させたい。反復させることで読者に強い印象を与える。
- ②読者がすでに知っている知識を利用する（schema-oriented language）（Short, 1988）。これによって読者が物語にすぐに入ることができる効果が期待される。
- ③動詞の選択による効果により登場人物の見方を読み取ることができる：verbs of perception and cognition（see, hear, imagine, think, believe）
- ④これ以外に、この物語では、主人公 Timothy の感情の動きが重要なポイントになるため、感情を表現する言葉に注目する。
- ⑤外国文化への気づき：外国文化に注目をさせることは、Short の本には記して無いが、英語を外国語として学ぶ学生のために、英語圏の文化を表している物・事象に注目を促す。

2.2.7 研究協力者と実施期間

対象学生：東京女子大学の国際英語学科 2 年生 22 名

期間：2019 年 4 月から 5 月にかけての授業

2.2.8 実施の手順

授業の中で文学作品を扱うことについては、国際英語学科に設置されている 3 つのコース（イングリッシュ・スタディーズ、英語教育、英語キャリア）への導入としておこなうことを説明した。3 つのコースについて半期の授業内で関連する学習活動をおこなうために、今回の小説読解には 3 回分

の授業を当てた。第1回目の授業の前の授業で小説を読む課題を出した。小説を読み内容を確認し、課題として1回目解釈と感想および疑問点（Appendix 2 参照）を書いて来るように指示した。第1回目の授業では、まず、物語全体の内容確認をおこなった。ここで学生は、課題でおこなったリーディングの確認（誤読を無くすために、意味の間違いなどの確認と物語の流れの確認）をすることになる。第2回目の授業では、文体論の説明をおこない、物語の中のどの言葉に注目をするのか、それによって解釈や理解がどのように深まるのかについての講義をおこなった。次の授業の課題は、第二回目の解釈と感想を書いてくることとした。第3回目では、グループになり、書いてきた解釈と感想について話し合い、グループとして結果をまとめ発表し、全体でシェアし、コメントを加えた。

最後に、授業のまとめとしてレポートの提出を課した。物語のメッセージは何か、メイン・テーマは何か、印象に残った表現についてまとめる内容である。

分析では、感想票とレポートを対象とした。第一回目の読みと第二回目の読みに変化が見られるかに注目し、レポートでは、内容理解が深まったかに注目をした。

3回の授業が終了した後で、まとめ資料として、教員が作成したレポートを配布した。

3. 結果と考察

1つの作品を繰り返し読むことで、ただストーリーを追うだけでなく、細部に隠された作者の意図を紐解くことができるようになれば、それは成長と言える（秦、2017）であろう。そうした観点から、学生の読みの変化に注目をし、仮説について検証をしていく。

仮説1：学生の英語小説に対する考え方や感じ方は授業（教え方）によりポジティブなものに変化する。

仮説2：英語小説を読んだ解釈と感想は、文体論の知見を入れた分析方法

を知る前と後では変化する。

仮説3：学生は、英語小説を原文で読む過程で、文体についての発見をすることで深い解釈をすることができる。

3.1 仮説1の検証

授業前の英文学作品に関するアンケート結果から、多くの学生は、英語で文学作品を読むことに関しては、重要であるとは感じているものの、実際に自ら進んで読むという行動には至っておらず、英語で読む文学作品は難しく理解し難いと感じていた。

授業における解説と学生自らが作品と向き合った結果、感想と最終レポートの結果から、学生たちの英語の文学作品に対する考え方や感じ方の変化が観察された。

「解釈と感想」では、英語小説に対する感じ方の変化が見られた。例として、「文化背景を知ることとひねった表現を知ること、2回目の方が楽しく読めた」、「他の作品も読んでみたい」、「英語小説を読む事への感情の変化」、「擬人法を知ること面白い表現を発見し、自分にとっておもしろい物語に変わった」、「単語のチョイスや登場人物の生活スタイルから文化が読み取れるというのは1回目ではわからなかった」、「文体や語彙に注目することで理解が深まり、それに伴い興味関心が増した」があった。こうした感想から、仮説1は検証されたと言えよう。

3.2 仮説2の検証

内容の確認と言語分析について説明をする前の学生の解釈と感想では、物語への理解が十分ではなかった学生も、説明の後で再度読み返し、「2回目の方が楽しく読めた」、「擬人法や面白い表現がたくさんあり、自分にとってよりおもしろい物語になった」、「1回目ではわからなかった物語の温かみを感じた」、「単語のチョイスや登場人物の生活スタイルから文化が読み取れるというのは自分で読んだ時にはわからなかった」などの気づきについての言

及があった。

Stylistics（文体論）の発見・気づきについての第1回目と第2回目の比較では、以下のコメントが見られた。「大文字やイタリックで書かれているなど気づかなかったことに気づけた」、「自分の読み取りが甘かったと気づかされた。擬人法がここまで使われているとは知らず、面白い表現もたくさんあり、自分にとってより面白い物語になった」、「さらっと目読ただけではわからなかった物語の温かみを授業で読み直して感じた」、「1回目は、ただ読んで内容を理解するのに精一杯で気づかなかったが、fineという言葉が繰り返し使われていて単語レベルで文学を読んでいくのは楽しいなど思った」。学生は、文体論の知見を得た後で、より深くテキストを理解することができ、小説への興味が増した。文体論によって言語形式への気づきや解釈の活性化が可能であることが伺えた。

3.3 仮説3の検証（教育的発見と文体論的发现をする）

読みに関して、Rosenblatt（1987）が Transactional Theory（交流理論）の

表2. 解釈の変化

第1回目解釈	どろ、chocolate porridge を木にあげる少年の優しさと、木には土が必要と、自然のあたりまえのことを考えるお話。
第2回目解釈	主に Timothy に焦点をあて描かれているあたたかい家族の物語。ハイライトシーンは、最後、ゲスト（リンゴの木）に chocolate porridge に見立てた土をあげる。文中に出てくる表現もかわいらしく読みやすい物語だが、その中に様々なメッセージが含まれており考えさせられる。
第1回目感想	姉はいじわるだが父はすごく優しい。父のおかげもあり、ティモシーは素直な子に育ちそう。
第2回目感想	読者層は子どもをターゲットにしていると思う。そのため、擬人法等で表現し、読み手をあきさせない作りになっているので読んでいておもしろかった。リンゴの木のことを“永遠の宿泊人”と言っていて、なんて素敵な父親なんだと思った。Timothy は優しく素直な子に育ちそうだった。文化背景を知らなかったり、ひねった表現があったが、それを理解すると2回目の方が楽しく読めた。

で分類した *effluent reading* (遠心的読み) と、*aesthetic reading* (情操的な読み) を参考にし、コメント (感想・解釈に提示されたもの) を文体論の知見を得る前と後で分類した。*effluent reading* は、情報を掴む読み方であり、*aesthetic reading* は、読む経験に没頭し、感情移入や喜び、発見を感じる読み方である。山元 (2008) は、この両者を、「前者は、公的 (辞書的、分析的、抽象的) な構成要素で、後者は、私的 (経験的、感情的、連想的) な構成要素である」(p. 108) とまとめている。英語話者ではない外国語学習者である日本人の学習者たちにとって、この2つの読み方は、段階的になると考えられる。学習者には、読みの第一段階として、物語の中で何が起きているのかを理解するための英語リテラシーが必要である。語彙力と内容を分析する力が要求されるが、この時点で、文体論の知見は役に立つ。第二段階として、物語の内容を私的な経験に置き換え、感情移入をすることで租借した内容を自らの糧としていくことができる。具体的に、今回の調査で学生の読み (解釈と感想) がどのように変化したか例を挙げる (表2)。

第1回目の解釈と感想では、物語の流れを表面的に把握することはできているようであるが、木を比喩的に宿泊人と表現した父親の心情や、そこに含まれたメッセージを理解するには至っていないことがわかる。文体論や内容解説の後の読み (公的構成要素の理解) では、物語が自分のものになっているのは、楽しさ (感情) に関する記述があり、読みが私的な局面 (*private aspects of sense*) (Rosenblatt, 1989, p. 161) を含んでいることがわかる。

研究参加者全員の第1回目と第二回目の解釈と感想における変化を量的に分析した。*effluent reading* (遠心的読み) ①③から *aesthetic reading* (情操的な読み) ②④へ発展した解釈・感想に書かれたコメント数の変化は以下のようになった (表3)。

表 3. 解釈・感想の変化

	第 1 回目解釈・感想	第 2 回目解釈・感想
①擬人法に関する記述	1	6
②感情表現	8	15
③言語分析に関する記述	1	7
④メッセージ	3	10

22 名中

言語分析に関しては、擬人法以外にも説明をしたが（Appendix 3 参照）、擬人法、大文字・イタリック体に主に注目が集まったようである。また、1 回目に自分で読んだ内容理解の不足を授業内の説明とグループでの話合いにより補うことができたようである。文体についての理解が深まることで内容理解も深まると思われる。

最後に、最終課題として提出されたレポートについて報告する。レポートでは、①物語のメッセージ、②メイン・テーマは何か、③印象に残った表現について書いた。ここでは、仮説に提示した、発見と気づきについてまとめる。

表 4. 発見と気づき

発見		気づき	
擬人法（子どもの目線）	11	努力は報われる・自分を信じて諦めない・やり続けること	13
イタリック体（強調）	2	男女の役割（固定観念を無くすこと・男女平等）	9
外国文化	3		

22 名中

解釈と感想の変化で見られたように、言語分析に関する発見が見られた（表 4）。“permanent paying guest”をよい表現だと感じた学生が多かった。作者からのメッセージとしては、ほとんどの学生が、諦めないことの重要性について書いていた。男女の役割について書いた学生も半数いた。男子学生が読んだ場合に同じような気づきをするのか考えさせられた。文学作品を扱うこと

について、「近年、文学離れが目立つが、こうした文字のみから得られる情報で物語を想像する楽しさも英語教育の中に入れられたらいいのではないか」と書いた学生もいた。こうした結果から、仮説の3は検証されたと言える。

4. まとめと今後の課題

今回の、英語文学作品を読み解く試行的授業では、気付くところがあった。テキスト選択の重要性と文学作品を授業で扱う留意点と英文学を扱う可能性である。

どのようなテキストを英語学習の教材として使うかという選択は、学校教育の場では、高校までは公立学校の場合、文部科学省選定教科書に限定されている。個々の教員が付属教材、あるいは発展教材として自分で教材を作成する場合も多いが、テキストそのものを選ぶという最も刺激的で創造的な過程が現在の学校教育の場では無い。テキスト選択の重要性を主張するのは、そこに教える側の教育哲学が示されるからである。「何を教えたいか」、「どのテキストを使いたいか」、「テキストを通して学習者に何を掴んでほしいか」は、教育を担当する者が教育目標を考える上で重要な課題ではないか。自分が担当する学習者のためにテキストを選ぶことは容易ではない。多くの時間と労力を要する作業である。しかしながら、そうした過程を持てることは教える側のモチベーションに繋がると考える。

大学に来るまでに英語の文学作品の授業をほとんど経験していない学習者が多い理由は、高校までの教科書の中に登場する文学作品が激減していること、教える側も評価方法や教授法に不安を感じていることが原因であると考えられる。文学作品を教える授業研究や評価についての研究事例が増えることが期待される。

2回の解釈と感想をまとめた後で、グループで意見を交換する時間を設けた。自分の意見とは異なる意見を知ることで自分の考えを見直す機会になると考えたからである。ある学生は感想で、「いろいろな見方ができる文学というのは正解・不正解がない世界なので、今まで答え合わせの教育を受けて

いた人にとって難しいと感じてしまう。もっと自分の意見をもって、それを怖がらずに伝えられるような人になりたい」と書いた。学習者間での解釈についての話合いの有効性はあると考えられる。少人数で文学テクストを読む読書サークル、Literature Circles (LCs)、など、学習者が主体的に読解・分析をおこなう活動も参考になろう（今村・小野，2014）。

最後に、文学を授業で扱うことにより何ができるかについて、教員教育の側面から（特に、思春期までの教育について）言及したい。

昨今、第二言語教育に関する分野の研究では、感情（emotion）に焦点をあてた論文も増えて来ている（Delaware, 2013）。外国語教育がおこなわれる教室では、学習者の心の動きがモチベーションや不安に繋がるということは、それらの研究結果を待つまでもなく、多くの学習者・元学習者が納得することであろう。一方、感情に関して言えば、何も外国語教育に限ったことではなく、教室の中では、教える側と学習する側の様々な感情が交差することは誰もが経験済みであろう。教える側は、教室内で飛び交う感情の摩擦を無視できない。

今回の作品を、ある教室に置き換えてみる。Timothy のような生徒、Sally や Pink のような生徒は容易に発見できるであろう。30人以上もいる教室の中で個々の生徒の気持ちに注意を向けるのは教える側には困難なことではあるが、実は最も重要なことである。生徒の感情を感知するレーダーを身につけた教師は、今回の作品の父親のように気持ちを理解し、対応法を考えることができる。教授法や習得方法に精通することも重要であるが、教室という小さな社会（Holliday, 1999）においては、教師は、「観察」から「判断」へと瞬時に対応を決めていかなければならない。そして、それが本当は教師という仕事の醍醐味なのではないかと思う。

教職を目指す学生たちに、今回の物語の前半を読んでもらい、Timothy を巡り何が起きているのか考え、自分が父親であつたら、どのようにするか話し合う機会を設けるのも一案である。また、今回の物語を学校に置き換え、学校の教室で同じようなことが起こった場合に教師としてどのように対

応するかについて話し合うことも興味深い。

今回の調査を経て文学作品には様々な可能性があることを実感した。言語への発見、言語の裏にある意図を読み取ること、物語が伝えたいことを掴み取ること、文化の違いへの気づき、など豊かな時間を学生たちと共有することができた。文学作品を授業で使う可能性を広げるために、テキストを探す旅に出ることにしよう。

参考文献

- 飯田敦史・山口高領・奥切恵・青田庄真・新井巧磨・鈴木健太郎・多田豪・辻りこ・中竹真依子・濱田彰・藤尾美佐・米山明日香・木村松雄 (2019). 「教員養成課程コアカリキュラムの実態調査: 大学教職担当者の見解から」. JACET-KANTO Journal, vol. 6. pp. 23-41.
- 今村有希・小野章 (2014). 「文学テキストを用いた英文読解」『中国地区英語教育学会研究紀要』, No. 44, pp. 21-30
- 佐野正之 (2007). 『アクション・リサーチのすすめ』大修館
- 諏訪部浩一 (2017). 「小説への誘い: 入り口としての 20 世紀アメリカ小説」日本英文学会 (関東支部) 編. pp. 224-232.
- 秦邦夫 (2017). 「小説への誘い: 物語を読むことの愉しみと難しさ」日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』研究社, pp. 205-214.
- 日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』研究社, 2016.
- 山元隆春 (2008). 「交流理論は学習者に何をもたらすか」広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部第 57 号, pp. 107-116.
- Burton, S. (2016). An Overview of English-language Literature Study in Japan. *Lit Matters*, Issue 9, pp. 112-140.
- Delaware, J. (2013). *Emotions in Multiple Languages*. Palgrave Macmillan.
- Holliday, A. (1999). *Small Cultures, Applied Linguistics*, Oxford University Press. pp. 237-264
- Mahy, M. (1973). *Wait for me!*: Dolphin Paperbacks.
- Nunan, D. (1999). *Second Language Teaching & Learning*. Cambridge University Press.
- Rosenblatt, L. M. (1978). *The Reader, the Text, the Poem: The Transactional Theory of the Literary Work*. Southern Illinois University Press.
- Short, M. (eds.) (1988). *Reading, Analysing and Teaching Literature*. Longman.
- Short, M. (1996). *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*. Longman.
- Widdowson, H. G. (1975). *Stylistics and the Teaching of Literature*. Longman.

キーワード

英語の小説、文体論、アクション・リサーチ、情動的な読み、教育的発見

Appendix 1: 文学作品に関するアンケート

以下の質問は、英語の授業で文学作品を読むことに関するものです。簡単に回答を書いてください。

1. 英語で文学作品を読みますか？
2. 英語で文学作品を読むことは重要だと思いますか。何を 읽습니다か。
3. 授業外で英語の文学作品を読みますか。
4. 英語の文学作品を読んで興味深かったことや役に立つことを学びましたか。
5. 特に興味のある英語圏の文学作品はありますか。
6. あなたが好きな英語文学の作家は誰ですか？
7. 日本語に翻訳された英語文学作品を読みますか。
8. これまでに読んだ（英語か日本語翻訳で）3冊の日本以外の本で好きなこの何ですか。
9. 英文学作品を買いますか、それとも借りますか。
10. 本を選択するときの基準は何ですか。
11. 大学の図書館から英語の文学作品を借りますか？借るとしたら、1年間に何冊くらいどのような本を借りますか？
12. 日本語の本、雑誌、漫画などを 읽습니다か？
13. 日本の作家で好きな人は誰ですか。その理由は何ですか？
14. 文学作品を日語以外の言語で 읽습니다か。
15. 英語の文学作品を中学校や高校で 읽었습니다か？
16. 英語の文学が読めない理由は何だと思いますか。
17. 日本語の文学が読めない理由は何だと思いますか。

Appendix 2: 解釈と感想

1 回目解釈と感想（必要であれば本文のどこかを指摘する）名前（ ）

解釈（物語をどのように理解したか）
感想
疑問点

2 回目解釈と感想（必要であれば本文のどこかを指摘する）

解釈（物語をどのように理解したか）
感想
疑問点

Appendix 3: 授業内使用ハンドアウト

〈言語分析〉

pages/lines (ページと行) を記入

反復 (強調) 大文字 (capitals)	
Schema-oriented language (すでに持っている知識)	
Pronouns/nouns/adjectives 代名詞・名詞・形容詞・ (動詞) Personification (擬人化)	
動詞の選択 Perception/Cognition (see, hear, imagine, think, believe) 登場人物の考えを暗示する	
感情を表現する言葉	
外国文化 (Foreign culture) *	

* 外国文化は、Short の本には無いが、英語を外国語として学ぶ学生のために、英語圏の文化を表現している物への説明が必要である。

〈物語の流れ〉

Pages/lines (ページと行) を記入

Characters (登場人物)	
Setting (place & time) 場面 (場所と時間)	
Main event 主な出来事	
Main theme 主な主題	
Narrator 語り手	

Appendix 4: まとめ資料

Detective Novel の調査

2019.5

鈴木 栄



Detective Novel は、物語の中に現れる言葉や表現を調査し、物語の真相を探します。

今回の依頼は、児童文学作家 Margaret Mahy の作品 "Chocolate Porridge" に関するもので東京女子大学のある学生から来ました。Detective Novel は、早速調査を開始しました。「作者は、どのような技法を使って伝えたいことを表現しているか」「この物語は何を伝えようとしているのか」を明らかにすることが今回の調査の目的です。



第 1 回調査

Detective Novel は、第 1 回調査として、依頼された物語をざっと読み流れを掴みます。わからない語句については辞書で調べ、登場人物、場面の設定、話の流れを追います。

第 2 回調査

第 2 回目の調査は、物語で使われている言葉を細かく見ていきます。そのためには文体論 (stylistics) という眼鏡が必要です。Detective Novel は、眼鏡をかけて調べ始めました。

調査に必要なのは、記入シートとマーカー、ペン、辞書です。

⑥反復 (repetition)、つまり物語に繰り返しあらわれるモノやイメージに注目します。反復させることで読者に強い印象を与えます。また、大文字で表現することで重要性を強調します。

⑦読者がすでに知っている知識を利用します (schema-oriented language)。これによって読者が物語にすぐに入ることができる効果が期待されます (schemas help us to understand texts and situations)。

⑧動詞の選択による効果により登場人物の見方を読み取ることができます: verbs of perception and cognition (see, hear, imagine, think, believe)

⑨擬人化 (personification) により物に対して親近感を抱く効果が期待できます。

⑩外国文化に関する情報: 読者が第2言語としてテキストを読む場合には、書かれたテキストのコンテキストや文化に関するものに注目します。

⑪これ以外に、この物語では、主人公 Timothy の感情の動きが重要なポイントになるため、感情を表現する言葉に注目をします。

第二回調査報告書は次のように提出されました。

〈言語分析〉

Pages/lines (ページと行) を記入

反復(強調) 大文字 Capitals	too ... to (p.22 l.5 l.6) Chocolate Porridge (p.21) chocolate porridge (p.25,26,27,28,29,30,31,32) Sprinkle and Stir (p.27 l.4)
Schema-oriented language	Chocolate porridge (p.21) cooking for the weekend (p.21 l.2) apple tree (p.29) biscuits (p.32 l.15, 16) scones
Personification (擬人化)	he (p.29 l.7, 8) (personification 擬人化) teeth waiting (p.22 l.15) (personification 擬人化) tools were camp- ing out (p.22) permanent paying guest (擬人化) (p.29 l.5) anxious (p.31 l.2)
動詞の選択 Perception/Cognition (see/hear/think/believe)	remind Timothy of grated chocolate (p.23 l. 4) thought (p.23 l.6, p.27 l.22) thinks (p.24 l.4) can't think (p.29l. 2) think (p.29 l.7)
感情を表現する言葉	Timothy frowning (p.21) indignation (p.21) powerful (p.24) sneered to himself (p.25) smile (p.26) mysterious smile (p.26) whispered (p.28) pleased to meet you (p.29) cried in great triumph (p.32)
外国文化 (Foreign culture)*	Chocolate porridge (p.21 title) Friday afternoon (p.21 l.1) gingerbread (p.22 l.2) the flower show (p.22 l.3) lawnmower (p.22 l.16) mud pie (p.24 l.7) tea (p.32 l.13) scones

* 外国文化: 英語を外国語として学ぶ学習者は、英語圏の文化を表現している物への理解が必要である。

〈物語の流れ〉

Pages/lines (ページと行) を記入	
Characters (登場人物)	Timothy's mother (p.21,l.1) →Pink / Sally (p.21 l,3) →Timothy (p.21 l.4) →Timothy's father (p.22 l. 18)
Setting (place & time) 場面 (場所と時間)	kitchen→outside / terrace / garden →kitchen →garden Friday afternoon
Main event	Timothy's mother and his big sisters are cooking in the kitchen. Timothy had to go outside. Timothy cooked Chocolate porridge with garden dirt. Timothy's father brought a permanent paying guest. The permanent paying guest (an apple tree) liked Timothy's Chocolate porridge. Timothy's sisters thought that cooking for trees would be fun. Timothy's father and mother proposed an idea (next time Timothy will cook and girls will work in the garden).
Main theme	Cooking is for boys and girls. It's important not to give up. An alternative idea may solve problems. Sharing is important.
Narrator 語り手	The third person (probably author)

第3回調査 (分析)

第3回調査では、1回目と2回目の調査報告書を見て、分析をしていきます。調査依頼をもう一度見直してみましょう。

「この物語は何を伝えようとしているのか」「作者は、どのような技法を使って伝えたいことを表現しているか」でした。Detective Novel は、調査結果から最終まとめを書き始めました。この物語を通して作者 (Mahy) は、何をどのような技法で伝えようとしたのでしょうか。



Detective Novel の報告書です。

読者が NZ の子供であれば、彼らが小さい頃に泥遊びをしていて泥団子 (mud pie) を作った経験があることを想定し、同じ材料 (泥と水) に柴と塩を入れることで特別

なものである chocolate porridge に仕上げた。週末には女性たちが料理をするという習慣があることもわかるように Friday afternoon を入れている。リンゴの木を選んだのも、**読者にわかる**種類の木であるからである。読者の生活圏内にあるできごとや物を入れる事で、**読者が物語の中に入りやすい状況を作ることができる**。

この本は、児童文学に属し、読者は子供を対象としている。児童文学に特有の「物の擬人化」が随所に見られる。「芝刈り機の歯は草にぶつかるのを待っていた」(p. 22)、「庭仕事の道具たちはテラスでキャンプをしていた」(p. 22)、リンゴの木を「永久下宿人 (permanent paying guest) と名づけ、木を彼 (he, p.29)」と表現した部分、最後に、リンゴの木は考えた (thought) (p. 32) に観察される。擬人化された物や生物に、**読者である子供たちは親近感を抱く**。

主人公の Timothy は、姉たちに相手にされず、意気消沈していたが、自分で考えた chocolate porridge を作ることで自信を持ち始める。彼の気持ちを表現する frowning (p. 21) や、indignation (p. 21) は、最後にリンゴの木に chocolate porridge を食べさせたことで勝利の声を上げる (p. 32) という**達成感に変わった**。Timothy の気持ちをくみ、**応援したのは父親で**、Timothy が、自分が作った chocolate porridge を食べてくれる人がいないのではないかと訴えを聞き、リンゴの木を「永久下宿人 (permanent paying guest) という人に見立て、しかも、木は彼 (he, p. 29) で表現し、木も自分と Timothy の仲間 (boys) であることを暗示させている。それは、その後に続く父親の言葉、"No need to let the women know what we're up to." に表現されている。

Timothy の姉たちは、木のために料理をするのも悪くはないと思う。そこに、すかさず父親が声をかけ、今回は交代(姉たちは庭を手伝う)することを提案する。

作者が読者に伝えたいメッセージは、料理が女子だけのものではなく、男子にも機会を与えること、Timothy のように、一度拒絶されても「自分で考え」「代案を考える」ことで道が開かれるのであきらめてはいけないこと、そして子供を応援する大人の姿である。

〈コラム〉

③ **Chocolate porridge** とは何か。Porridge というと「おかゆ」を思い浮かべる人が多いと思うが、日本の米から作る「おかゆ」とは異なり、主材料は oats (大麦) である。Net で見てみると、イギリスの国民的シェフである Jamie Oliver のレシピが一番

上に出てくる。

Quality cocoa powder creates a luxurious feeling of comforting chocolaty goodness in this porridge recipe, but without all the sugar and saturated fat we'd get from actually adding chocolate to the mix.” 動画を見ると、Jamie は、この porridge の上にいちごとクリーム、ミントの葉を載せ、おしゃれな朝食に仕上げている。

Chocolate Porridge



Gingerbread



Flower show



キーワード

英語の小説、文体論、アクション・リサーチ、情動的な読み、教育的発見